

香港の詩人王良和について：ザボン連作と彼の詩壇的位置

岩佐, 昌暲
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5549>

出版情報：言語文化論究. 19, pp.179-191, 2004-01-31. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

香港の詩人王良和について

—ザボン連作と彼の詩壇的位置—

岩 佐 昌 暲

1. はじめに

香港の現代詩はこれまで日本に紹介されたことがないようである。もともと「香港文学」という領域自体がわが国の文学研究には存在しなかった。香港文学をわが国にまとめた形で最初に紹介した文献は金文京の「香港文学瞥見」¹であろう。その後、藤井省三²や西野由希子³らによる研究や、香港文学の大きな分野を占める通俗文学、特に金庸の武侠小说の翻訳⁴などを通して、香港文壇のおぼろげな輪郭や文学の一斑がようやく明らかにされるようになってきた。しかし、香港現代詩ということになると、どういう詩人がどういう作品を書いているのか、という風な最も基本的な事柄すら一向に定かではない、というのが実態である。

私はこのたび山田敬三福岡大学教授を代表者とする共同研究（「環太平洋圏の華文文学に関する基礎的研究」）で香港文学を担当したことがきっかけで、香港現代詩の実作品に触れる機会を得、また香港への調査旅行（2001年3月）で、香港現代詩の書き手たる詩人たちとも知り合うことができた。小稿はそうした機縁で知り合った詩人たちの作品のうち、私が最も強い手応え（読み応えというべきだろうか）を感じた王良和の作品のうち、「柚子」（ザボン）を主題とした連作を紹介しようとするものである。

小稿は平成13年度～15年度文部省科学研究費補助金「環太平洋圏の華文文学に関する基礎的研究」（研究代表者：山田敬三）による研究成果の一部である。詩の翻訳について、武継平助教授から種々のご教示をいただいた。お礼を申し上げる。

¹ 金文京「香港文学瞥見」（可児弘明『香港および香港問題の研究』東方書店、1991年9月刊所収）

² 藤井省三「香港アイデンティティの形成と香港文学の展開」（『すばる』1997年7月号）、『現代中国文化探検—四つの都市の物語—』岩波新書、1999年11月など。

³ 西野由希子「香港小説概観—施叔青の作品を通して」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第18号1999年4月など）。

⁴ 金庸については鈴木陽一編著（神奈川大学評論ブックレット）『金庸は語る—中国武侠小说の魅力』御茶の水書房、2003年9月がある。

2. 王良和について

王良和は 1963 年香港で生まれた。原籍は浙江省紹興である。香港で生まれ育ち、香港の文化や教育の下で成長した作家を「本土作家」（香港っ子作家、香港の市民意識を具えた土着作家）というが、王良和はその本土作家の一人ということになる。その略歴は以下のようである。

1987 年香港中文大学新亞書院中文系卒業後、96 年まで高校（余振強記念第二中学）教師をつとめ、96 年香港教育学院中文系に移り、現在もそこで教壇に立っている。この間、香港大学大学院修士課程で学び、95 年修士論文「劉大白の詩およびその詩論の研究」によって哲学修士の学位を得た。97 年には香港中文大学大学院で教育学の課程を終え、2001 年香港浸会大学（The Hong Kong Baptist University）で PhD を得た。学位論文は「詩観の衝突と主流の争い：香港八、九十年代詩壇の流派紛争—「鍾偉民現象」に照らして見る」というものだった。

王良和自身が「私は文学賞出身だ」⁵というように、彼は香港の様々な文学賞で優秀賞を獲得している。最初の受賞は 1980 年第 7 回青年文学賞の文学批評初級部門 2 等賞、新詩部門優異賞で、17 歳の時である。青年文学賞は香港大学と香港中文大学の学生会が主催するもので、以後 8、9 回青年文学賞を受賞、83 年以後は第 3、4、6、8、11 回の市政局中文文学創作賞、1983 年度大母指詩賞、1984 年から 87 年まで 4 回連続して中文大学高雄先生記念文学賞、93 年第 2 回市政局中文文学雙年奨詩賞および散文推薦優秀賞、97 年第 1 回香港芸術發展局文学賞、2003 年第 7 回香港中文文学雙年奨など数々の文学賞を受賞している。香港における文学賞の文壇的意味やその実態などについては余りよくわからない。しかしこうした文学賞の受賞歴が、王良和の香港詩壇における評価を示すものであることは間違いない。

1986 年処女詩集『驚髮』を山邊社から出版。『驚髮』に収められた作品は、この年に台湾に去った香港中文大学時代の彼の文学上の師・余光中（1928—）の強い影響下で書かれたものだったようだ⁶。余光中は 1928 年南京生まれの詩人。49 年中華人民共和国成立後香港経由で台湾に渡った。1974 年に招かれて香港中文大学中文系教授に就任、以後 86 年香港を去るまで 12 年間中文大学で教鞭をとった。余光中の詩は「新古典主義」といわれるが、それは中国古典に詩想の淵源をもつものであるようだ⁷。香港在住中の詩集に『與

⁵ 「起「從青年文学奨發展管窺七、八十年代香港文壇概況」座談会」『呼吸詩刊』第 2 期、呼吸詩社、1996 年 9 月。

⁶ 劉登翰主編『香港文学史』人民文学出版社、1999 年 4 月刊。ただし王良和の項（第 14 章第 2 節）は楊健民執筆（「陳德錦、鍾偉民、王良和等和“新德”詩人群」）。

⁷ 梁敏兒「懐郷的完成：余光中の詩與香港」黄維樑主編『活潑紛繁的香港文学—1999 年香港文学國際研討會論文集（上冊）』香港中文大学新亞書院・中文大学出版社、2000 年所収。金文京「香港文学瞥見」は余光中の詩について「中国古典の伝統と西洋現代文学の手法を融合させた」と評している。また作品の翻訳紹介に林水福・是永駿編、是永、上田哲二訳『台湾現代詩集』国書刊行会、2002 年 1 月劉燕子、秦嵐編『藍・BLUE』第 3 期同編集委員会 2001 年 3 月、がある。

永恒拔河』洪範書店（台北）、1979年刊、などがあり、その作品は香港詩壇に大きな影響を与えたとされる⁸。

王良和は彼から受けた影響の大きさによって「余派の香港における門人の一人」と言われることがあった。しかし王自身何とか余光中の影響から脱け出し、独自の詩歌世界を築きたいと考えており、91年、余光中の影響を脱して「自己の独立した詩歌の品格形成にむけて踏み出した重要な一歩」⁹である第二詩集『袖灯』詩雙月刊出版社を刊行した。ザボンを様々な角度から描いた9編の連作を中心に編まれたこの詩集はドイツの詩人リルケの影響を受けていることが歴然としている。王良和自身「私の事物詩（原文「詠物詩」）はかなり深くリルケの影響を受けていると思う」と述懐している¹⁰。

94年には新穂出版社から第三詩集『火中之磨』を出した。97年第四詩集『樹根頌』を呼吸詩社から出版した¹¹。最も新しい詩集に『尚未誕生』東岸書店、1999年12月刊、があるが、これは1986年から98年までの代表作を集めたものである。このほか、散文集に『秋水』突破出版社、1991年刊と『山水之間』匯智出版社、2002年刊があり、また小説集『魚呪』青文書屋、2002年刊があるというが未見。

3. 王良和詩の背景

香港の現代文学は、もともと「内地」とよばれる中国大陸の作家たちによって作られてきた。戦乱を避け、あるいはもっと別な理由で香港に寄寓した内地文壇の既成作家たちが、香港を舞台に文学活動を展開した、それが香港文学の出発点だった。従って出発期の香港文学は内容的にも質的にも大陸の文学と異なるところはなかった。だが、中華人民共和国が成立した1949年以後はそれまでと異なる新しい段階に入る。内戦を避けて香港に居住していた作家の多くは、新中国成立と同時に大陸に帰還した。それと入れ替わりに、大陸の政権と相容れない作家、文人たちが香港に流入してきたのだ。彼らは「南来作家」と呼ばれるが、こうして49年を境に香港文壇は大陸の政権に敵対的ないし批判的な「南来作家」たちが大きな発言力をもつようになり、親中国的な作家グループと対立するようになった。これを後押ししたのがアメリカの政治資金によって運営されていた様々な反共出版社、宣伝機関だった。50～60年代の香港文壇を支配していたのは激しい左右のイデオロ

⁸ 陳智徳「詩観輿論戦—「七、八十年代香港青年詩人回顧專輯」的史料補充」『呼吸詩刊』創刊号、呼吸詩社、1996年4月。

⁹ 楊健民、注6に同じ。

¹⁰ 「詩歌、心霊的印記—王良和先生談詩歌創作」『文苑』革新号第4期、嶺南学院学生会中文系会、1995年刊。

¹¹ 因みに言えば、『樹根頌』を出版した呼吸詩社は、96年4月王良和がその仲間の詩人たちと刊行した詩誌『呼吸』の発行元であり、『尚未誕生』を出した東岸書店は旺角にあるいわゆる二樓書店だが、もっぱら詩集を初めとする文学書を扱う。店主の梁志華氏は自身も詩人で『我們』という詩誌のメンバー。そしてその『我們』は95年夏、芸術中心（香港市政府の機関であろうか）主催で開かれた講習会「詩作坊」の受講者たちが96年6月に結成したのだが、そのときの講習会の講師が王良和だったという因縁がある。

ギー対立であった。

こういう状況が変化するのは 70 年代後半、中国の文革終了後のことである。中国が階級闘争路線から経済建設（＝改革開放）路線に転換したこと、ソ連や東欧圏の崩壊といった香港をとりまく世界情勢の変化がその大きな原因であることは確かだが、ほかに香港文壇内部の人的構成の変化を見逃すことはできない。それは 50～60 年代の文壇をリードした冷戦時代世代の退場と、それに替わる本土作家世代の登場である。（因みに余光中が台湾に去ったのは香港返還の日程が決まったことによる不安からであった。）70 年代後半以後、左右のイデオロギー対立といったレベルでの〈政治〉は、もはや香港文壇の主要テーマではなくなっていた。文壇の関心は〈文学〉そのものに、あるいは文学をめぐる〈探索〉や〈実験〉に移り始めていた¹²。

王良和がその一步を踏み出した 80 年代の香港文壇は、こうした大きな転換の時期にさしかかっていた。王良和は、この〈政治〉よりも〈文学〉そのものを主題にしようとする時代の雰囲気の中で詩作を開始する。香港文学が、多く、香港というかつての植民都市、今やアジア有数の金融都市の風貌やそこに生きる人々の現実（生活の事実だけではなく、都市が引き起こす感覚や情感も含めた現実）に眼をむけ、それを写そうとする都市文学であるのに対し、王良和の詩は違う。彼はあわただしい現実背に背をむけて事物と向き合い、事物の实在（事物そのもの）を凝視している。ひたすら事物に向う彼の思考と技法が、独自の世界をもつ作品として結晶することができたのには、このような時代の雰囲気が与っていたのである。

4. 王良和の詩法

王良和の詩は、身のありふれた事物を素材にするものがほとんどである。それは、ここに取上げるザボンや、ただの樹木、野菜、花、家具、古ぼけた家屋、石像などといったものである。だがそれらは彼の作品舞台の単なる装置などではない。彼の詩は素材たる事物そのものを描こうとする。画家がモノをキャンパスに实在させようとするように、彫刻家がモノをそこに在らしめようとするように、王良和は対象となる事物を言葉によって、詩という形式の中に正確に再現しようとする。それは、王良和自身が認める「リルケの深い影響」のもとに彼が掴んだ方法だった。それについて彼はこう述べている。「詩人はまず事物に対し観察をおこない、その後モノの感覚世界に入っていこうと試みるが、モノのもつ感覚を外部に向かって放射し、外在の世界を測定しようとさえする」¹³。それでは、詩人はどのようにこの方法を詩作に適用しているのだろうか。以下、彼のザボンを素材にした連作に基づいて、その詩法を紹介しよう。

「ザボン」連作は、すでに述べたように王良和が余光中の影響を脱して自己の詩風を確立する転機となった詩群であるが、それが連作たらざるを得ないのは、事物の实在を言葉

¹² 劉登翰「当代香港文学近期發展的社会背景和思潮特徵」『香港文学史』（注6）第11章。

¹³ 注10に同じ。

によって再現するには、事物のもつ様々な相と関係性（人と事物との、また事物相互の関係性）を描かねばならず、しかもそれは一つの詩作品だけでは描き切れないからであろう。彫刻のような造型芸術ならば、彫刻によってザボンを再現すれば事足りる。それが説明によって事物を再現するほかない言語芸術の弱点である。

さて、連作において、まず「観柚」（ザボンを観察する）や「剥柚」（ザボンを剥く）は、彼の詩法の出発点と到達点を述べた詩だと言うことができる。「観柚」の冒頭で「立ち止まって細かく観察する」と彼が言うように、それはまず対象となる事物の細かい観察から始まる。その目的は「境界をもたない一個の円形にすぎない」「平凡なザボン」の「円の中心の最も奥深い世界」を見ること、そしてそれを記述し、一個の实在として出現させることである。だが表面の観察だけでは十分ではない。実際に対象に触れ、その内部まで観察しなければならない。「剥柚」（ザボンを剥く）が書くのはそれである。対象に触れ、対象と闘うことで見えてくる事物の一面を描く。ザボンの皮を剥こうとする指が感じる抵抗感を通して、ザボンの生命力を肉感的に伝える。

しかし、見ることも触ることも所詮は外部から対象に迫ることではしかない。事物の实在を現出させようとするならば、対象となる事物の内部から事物を明かにすることが必要である。「薄い皮のザボン」（薄皮柚）が書くのはそれである。この詩で「私」とは「皮」である。ここで果肉が「少しずつ膨れ始め、圧力が四方八方から迫ってくる」のを感じるのは、もはや外在する指ではない。それはザボン自身である。事物の外にあって事物を観察する者であった詩人は、ザボンの皮と化して、対象の内部に入りこんでいる。「柚灯」（ザボンのランプ）も同じ方法である。「柚灯」がどのようなものか、想像するほかないが、ザボンの中をくりぬいて果肉を取りだし、乾燥させた後、ランプとして使うのであろう。詩はランプとなったザボンを、そのザボンの立場から描く。

「夢柚」（夢にザボンを見る）は幻想的な作品である。自然の秩序に従うのではなく、自分の意思によって花を咲かせ、実を实らせることはできないのか、という切実な願い（問い）を抱いて、真夜中、「長い時間をかけて／山里の原野から枝を伸ばして」詩人の寝室にやってきたザボンと詩人との対話によって構成された詩である。事物を外側から認識するのでも、事物そのものと化して、内部から認識するのでもなく、外と内との対話によって対象に迫ろうとする方法ということになる。

前引『香港文学史』は一連のザボン詩について「人生に対する彼の省思が寓されている」と述べているが¹⁴、「孤柚」（ひとりぼっちのザボン）、「碧柚」（碧のザボン）には人生に対する思索という傾向が色濃く表れている。

すでに見たように王良和の詩風が一変するのは、このザボンの連作からであり、その大きな契機となったのがリルケの影響であった。リルケからの具体的な影響については、香港の女流詩人・洛楓（1964-）に詳細な分析がある（洛楓「渾円的实体有自己的重量—論王良和的「詠物哲理詩」」¹⁵）。この論文は、リルケのほかロダンや香港の指導的詩人・梁

¹⁴ 楊健民、注6に同じ。

¹⁵ 洛楓のこの論文は王良和の第四詩集『樹根頌』の解説として95年に書かれた。

乗鉤（也斯、1949—）の影響についても論じている本格的な王良和論で、詩の読みについて教えられるところが多かった。

なお以下の翻訳のテキストには『尚未誕生』東岸書店、1999年12月刊、所収の作品を用いた。

王良和の柚子（ザボン）連作

ザボンを観察する（観柚）

道で、私がよく立ち止まって細かく観察するのは
太陽の下に真直ぐに立つ一本のザボンの木
濃い緑色のザボンがよく茂った葉に
覆われて隠れている、同じ色で
危うく私の目を掠めてしまいそうだ

この静止した生命にいつも眼を凝らしているために
たまらなくなってこっそり
低い枝から一個もぎ取ったことがある
熟れているのか生なのか区別がつかなかったが
真ん丸い実体には自分の重みがあった
両手に包むが、きらりと光る緑の皮を隔てているのだ
ザボンの成長の実情は誰にも分からない

ぐさりと芯までナイフを入れる
分割される痛みが破裂の音からやってくる
晴雨の神秘を切開しようとするかのように——
内にも外にも分厚い皮が一層一層繋がり
空間の大半を占めていて、果肉の方は
小さくて目立たないが、輝く目のように私を見ていた

たかが平凡なザボンにすぎない
枝にぶら下がっていても通行人から無視される
全体をあれこれ観察してみても、せいぜい
境界をもたない一個の円形にすぎない
そして私は円周の外で逡巡しているのがいいのか
それとも平面から立体に入ろうか？
その表面の視覚を移したとき、私には見えた
円の中心の最も奥深い世界が

(1986.9.4)

孤独なザボン（孤柚）

その変形したザボンは私に
 意志について思索を誘う
 鈴なりの果実はおのおのが
 十分な陽光と雨水を手に入れようと頑張っている
 高い枝で
 最も有利な位置を占めれば
 なぜか自然に膨張し優美な円形になる
 下に垂れた枝は
 たくましい成長とたしかな重量を実証している

対比してまずいと思うのは その弱弱しいザボンが
 ひとつだけ低い枝の一角に寂しくかかっていることだ
 遠辺の枝には
 栄養分が順調にゆきわたらない
 陽光は決まってもてっぺんの実に取られてしまう
 辺境に流された罪臣と同じで
 やせた土地にどうして豊かな収穫が望めよう？
 終には、ねじれ曲がって梨の形になり
 真性のザボン族からはじきだされて、ただ
 地に落ちるか枯れ萎れて当たり前であるかのようだ

私はその頑強な個性が不思議だった
 たとえ干からびても
 空間に自分の全体をさらすことを躊躇わない
 しとしと雨の中で
 洗われた表皮を光りに映させ
 悠然として囀る小鳥に向って呼吸する
 脆弱にはみえない
 表にでない剛強で黙って耐え忍び
 秋風が吹いて濃い緑が黄金色になると
 同じように熟し、同じように香を漂わすのだ

(1986.9.5)

碧のザボン（碧柚）

中秋を過ぎてから、樹上のザボンが次々に
 ぼとりぼとりと樹の周りの草地に落ちた
 ちらほらする黄金色の中に一つだけ
 緑で一見まだ熟していないのが高い枝にぶら下がっているのを見た
 わざと季節の神様に逆らっている
 少し傲岸で、強情に
 最初に実になったときの姿を守り抜き
 風に逆らう覚醒者のようだ。秋風が吹きそめると
 沢山のザボンが季節の移ろいを感じし
 枝と果実のつながる辺りから
 大急ぎで黄色になり 伸びて行き
 秋の陽に染まってそっと誇りを洩らすのだ——
 間もなくやってくる完成と、墜落の快感の

私は思い出す、かつて草むらで拾った
 枝を離れて落ちたザボンのことを
 熟れ切った豊饒さと甘さを想像したが
 裏切られた舌にははっきりと残った
 強い酸味と渋み
 熟した皮と色が虚偽かどうか
 どうして見分けたらいいのだろうか
 どのザボンも
 去年の成熟の季節を踏襲することに慣れ
 秋風を受け入れ、外の世界から
 己の成長の過程を量ることに慣れてしまっている
 表皮の鋭い触覚を
 中心にしまえ、四方八方に放て
 内なる虚と実を探知すれば
 熟れるものは自然に熟れ、落ちるものは自然に落ちる
 時をこえて落ちないあの緑のザボンは逆に私を驚喜させる
 あれこそ、実を結ぶことの誠を知り、それに執着するものだ
 (1986.10.21)

ザボンを剥く（剥柚）

金色の月を捧げもっている
 熟しきったこのザボンは掌の中にある

重い、実在の手応えがある、私は思索している
 一気にナイフを入れて切り分け食べてしまうべきか それとも
 皮を少しずつ剥いて
 固く握った拳骨の指を無理に引き剥がして掌をひらかせるように
 中心に隠された謎を徐徐に明らかにしていくべきか

驚いた、不思議なことにこの弱い果実が
 なんと強い力で意識的に
 皮を剥こうとする指の力と対抗しているのではないか
 まるで 馬鹿にはいけない、ましてイジメてはだめだと
 暗示してでもいるかのように
 緩めた五指にまた勢いをつけて引っ張ると
 横暴な指は急に力を増す
 わずか数ミリ剥いただけでこれ以上は越えようがない
 その成熟の中心にはさながら
 高い山、大地、泥土
 雲と風とあふれる陽光
 一場の暴風雨、激しく流れる河川 を孕んでいるかのように
 これらすべてが力を皮の間に加え
 人の力が次々に逼り来るのを堅く拒んでいるのだった。私は
 ふかあく息を吸い かつ
 腕の血管と筋肉を動員し
 力を奮ってひっぱり、割き、剥くのだが、感じるのはただ
 相手がまさに堅忍不拔の意志で
 沈黙し、屈することなく、剛毅に
 悠然たる態度で私の切歯扼腕に対してのことだけ
 私は考えていた
 ぐったりした手を皮から離すべきか、それとも
 あきらめず、少しずつ皮が剥がれ落ちるまで粘るべきか

その時だ、誰かが笑顔で
 きらりと光るナイフを渡してくれた
 (1988.2.14)

夢にザボンを見る (夢柚)

濃い香ばしいにおいを嗅いだ
 一陣の風とともにカーテンを巻き上げて潜入し
 四方の壁、柱時計、長短針に身をひそめている

真夜中を過ぎたところだ
 春の寒さがズシズシリと迫る
 季節は振り子の間を揺れながら移り
 夜に乗じて筏で水を渡り、音もなく進む
 こんなに静かだ 寝返りをうつと聞こえてきた
 枝と葉が延びて広がる音
 そおっと壁に沿って這いのぼる
 だが焦って押しあい犇めきあいぶつかりあう
 微かな音が響き、ひるんで急に動きを止めた
 驚きで広がった私の瞳孔が窓外を見た
 月影おぼろ、名も知らぬ樹の枝が花と葉を挟み
 窓の真中に横臥し、捻じ曲がり、もがいているのだ
 ザボンの花がひと房ひと房と焼け焦げ自ら焼死していく
 雪が激しい炎に焼かれるときのように、煙となって逃げていく
 その目は焦慮に満ち、強靱でしかも軟弱
 沈黙の間なよなよと私のベッドの縁に近づきこう言うのだ
 「どうか教えていただきたいのです
 私はなぜ真直ぐ立っているしかできないのですか？
 拠り所もないのに自分で自分を支えねばならず
 惑うことが多いのに必ず醒めていなければなりません
 心は閉じているのに終には開いて花となり
 季節はときどき悪戯しに来ます
 もう待ち切れないのです、超越と完成とを
 私は内に秘めた自分の意志でやりたいのです
 ああ長い春は止まることなく続いていきます
 どうか教えてください、どのようにすれば時間の制約を突破し
 一晚痛みを孕んで次の朝には大きな実を結び
 生命の大完成を証明できるのでしょうか？」
 その態度は誠実ねんごろで、苦しみ思うが答えが得られず
 長い時間をかけて
 山里の原野から枝を延ばしてここに来
 いらいら、じりじりしながら結果を待っているようだった。
 私は微笑み答えた
 「生命にはいわゆる大完成などありません
 自分の子房をよくよく見られるがいい」
 その者は驚き、悟ったようでもありまた
 退いて私の言葉を反芻しているようでもあった
 花と葉はたちまち撤退し
 瞬く間に夜空に飛び出し
 流星が宇宙に回帰したかのようだった

私は寝返りをうち目がさめ、部屋がほの明くなったのを感じた
窓外には樹は見え、うっすらと、部屋中に香ばしいにおいが漂っていた
(1988.7.26)

薄い皮のザボン（薄皮柚）

私には感じられる 真中の果肉が
少しずつ膨れ始め、圧力が四方八方から迫ってくる
沢山の力の漲った腕と掌（てのひら）が
周りの壁を押している、まるで
騒ぎ立て 居ても立ってもいられないように
焦る必要などない、私はかつて
何寸もの厚い皮の層でおまえをぐるぐると覆い
強すぎるほどの陽の光が緑の肌を焼き
豪雨が膚を打ち叩き、狂風が揺さぶるに任せた
制御不能のマストはいつ折れるか知れない
私は垂れ下がった枝にしがみつき
重心を安定させようと努め
風涛と闇より湧き来るものをくいとめ
中心の波静かな水域に飛び込んだ
傷ついた表皮は癒えてはまた傷つき
歳月の中で老いゆき、ざらざらに磨かれ、色褪せた

この一帯の谷底のザボン同様
私には大自然の案配が分かる
幾重にも環状に被うザボンの皮は もともと
この円球の主演ではない
かつては保護するための外壁だったが
最後には成長の障害になるかも知れぬというだけで
守衛の責任は皮層とともに縮まった
私は次々に空間を譲り渡し
渦の縁辺
領土の辺境 に退いた
私的な感情を残す気はなかった
お前の無限の膨張は実は私の尽きることはない
充実なのだから、私は当然喜んで
最も薄い金色の皮袋
お前の豊かで盛んな生命を包むべきだ

清新な気流が気孔から出入りし、
 内と外の調和した世界を貫くなら
 私は安心して高みから墜落する
 破裂した皮袋がお前の新生を成就させ
 静かに、種子を挟んで
 渦のように循環してめぐる自然の中に巻き込まれる
 (1990.4.12)

ザボンのランプ（柚燈）

こんなふうにごんじて一本の小刀に
 自分の身体を断ち切らせたのだ
 まるい果肉には種子が仕舞ってあったが
 それも自我の中心から
 すっかり出ていった
 ふっくらと丸い満月が雲の層から脱け出すみたいに
 一着の乾いた皮衣が残り
 秋風の中でだんだん襦袢（ぼろ）になった

誰もが言う　くりぬかれた果物の皮は空気にさらされると
 細菌が内外を歩き回り、黴がはえ、干からび
 香は瞬時に逃げてしまう　と
 だが私は中心に一面の空霊の在るのを感じた
 がらんと何もないからこそ空間の無限を感じる
 閉ざされた広さは大地のように延び広がり
 慈愛に満ちた星空が収まる
 どの星も大地を渴望し注視している
 空を見上げると、明るい星が一つ自在に下降してきた

おまえはそっと私の中心に足を停めた
 私はハスの花びらの船に
 乗りこんで秋の夜の水域を浮かびゆくかのようにだ
 ランプの芯から始まり
 灯の花はゆっくりと綻び、柔らかな花びらは外に反り返る
 同心の光りの輪がひとつ又ひとつと拡がり
 自我は明るく輝き一番周辺まで照らし
 暖かく、私の傷口全てを覆っている

熱せられた気流が中心に満ち溢れ

縮んでいた皮層は徐々に膨張して
かつてなかったほど充実し豊かになる
完全に蓋をしきれないから、皮の一層一層を透かして
表皮の細かい穴のひとつひとつにまで
金の光がほのかに浮かんでいる
一面の光暈が灼熱でひしめいているため
潜在していた香りが感動して解き放たれ
絡み合い、まとわりつき、丁度香炉の煙のように空中を浮遊する
真夜中は寒く、風が、さらさらと木の葉をなぶっている
私は服の襟を立てるように自分の皮袋を上にはばし
もはや一皿のランプとなっていた——
私は身を乗り出して仔細に眺め、お前が
美しさと快樂とによって
ざわめく風の中で人知れぬよう涙を流しているのを見た
熱いものが私の掌に落ちた
私は死と永遠との間を往来しているかのようだった

私はお前の一生分の涙を引き受けてもいい
完熟した全てのザボンがぼとんと音立てて
樹から泥土に落ち
覆いのない燭火が風の中で消えるとき
われわれは一枚の蓮の花びらの船のように
風と波の音の中を揺られて漂い
半開きの舷窓から外を眺めるのだ
思い残すことはない、この人生お前と
短い旅をし
風景となり またこの世の風景も見たのだ……

(1988.11.13)